



[野菜部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

9. 県北部のリーキの大苗深植え栽培で安定生産が可能な苗質及びその育苗法

[要約]

リーキの大苗深植え栽培では、葉鞘径 20mm 以上の二次育苗苗を選んで定植すると秀品収量が大きく向上する。その場合、二次育苗時の栽植密度を a 当たり 3,333 株とすると良苗が得られる。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 高冷地研究室

[連絡先] 電話 0867-66-2043

[分類] 情報

[背景・ねらい]

岡山県北部の降雪地帯におけるリーキ栽培では、晩夏～初秋までに生育を進めすぎた場合に増加する軟化腐敗症状が最大の減収要因であるため、本圃定植時の断根により一時的に生育を停滞させ軟化腐敗症状の多発を回避できる大苗深植え栽培を開発した。しかし、定植時の苗質が収量性に及ぼす影響は明らかでない。そこで、安定生産が可能な定植苗の基準を明らかにするとともに、定植苗の効率的な育苗方法を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 葉鞘径が太い定植苗ほど葉鞘径が太く軟白長が長い収穫物が得られ、葉鞘径 20mm 以上の苗を定植すると秀品収量が多くなる（図 1、図 2、表 1）。
2. 二次育苗時の栽植密度を a 当たり 3,333 株（畝幅 120cm、株間 5 cm、2 条植え）とすると葉鞘径 20mm 以上の定植苗の割合が 66%と高く、苗床 1 a 当たり 2,201 本の定植苗が得られる（表 2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 本試験は標高 450m 程度の準高冷地で品種「MLX-011」を用い、2月16日にチェーンポット CP-303 に播種し4月15日に二次育苗圃へ移植、7月26日に定植時の葉鞘径を表1の3水準に分けて本圃へ深植えし、8月19日及び10月12日に土寄せを行い栽培した結果であり、12月8日に収穫調査を実施した。
2. 供試品種「MLX-011」は2013～2015年度の3か年の品種比較試験において、推奨品種「MEGATON」と同程度の収量性が確保できる新品種である。
3. 準高冷地では、収穫の晩限は降雪の状況に依存する（概ね12月上中旬）。
4. 本圃への定植は、展開葉上位4枚の葉芯部が埋まらない程度の深さに埋め込む。



[具体的データ]

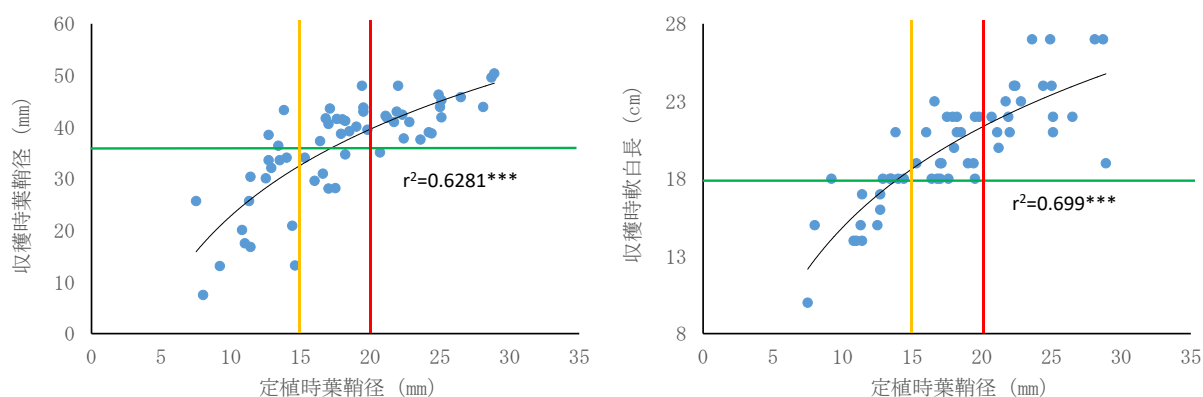


図1 定植時の葉鞘径が収穫物の葉鞘径に及ぼす影響 図2 定植時の葉鞘径が収穫物の軟白長に及ぼす影響
***は0.1%水準で相関関係が有意であることを示す

表1 定植苗の生育が収量及び品質に及ぼす影響

定植苗の葉鞘径	生存株率 ^z (%)	葉鞘径 (mm)	軟白長 ^y (cm)	総収量 (kg/10a)	可販収量 (kg/10a)	秀品収量 ^x (kg/10a)	推定粗収入 ^w (円/10a)
15mm未満	85	25.6	a ^v 16.2	a 761	610	105	314,031
15mm～20mm	100	35.7	b 20.1	b 1,739	1,739	1,142	962,396
20mm以上	95	38.9	b 23.2	c 1,948	1,948	1,634	1,289,796
有意性 ^u	-	**	**	-	-	-	-

^z 定植した苗に対する生存株の割合

^y H28岡山県産リーキ県下統一出荷規格により、軟白長は秀品及びA品は18cm以上、無印は10cm以上が出荷可能

^x 葉鞘径35mm以上かつ軟白長18cm以上のものの収量

^w 平成28年度高冷地研究室出荷実績を基に算出

^v Tukeyの多重比較検定により、異なる英数字間には1%水準で有意差あり

^u 分散分析により、**は1%水準で有意差あり

表2 二次育苗床での栽植密度が定植苗の葉鞘径に及ぼす影響

栽植密度 ^z	割合 (%)			利用可能苗数 ^y (株/a)
	葉鞘径 15mm未満	葉鞘径 15mm～20mm	葉鞘径 20mm以上	
3,333株/a	13.2	20.8	66.0	2,201
6,667株/a	27.3	36.4	36.4	2,424

^z 3,333株/aは畝幅120cm、株間5cm、2条植え、6,667株/aは畝幅120cm、株間2.5cm、2条植えとした

^y 葉鞘径20mm以上のものを対象とした場合

施肥、窒素：リン酸：カリウム=1.44：1.73：1.39 (a当たりkg)

[その他]

研究課題名：高冷地域に適した果樹・野菜・花品種の育成・選定と栽培技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2011～2015年度

研究担当者：川村宜久

関連情報等：1) [平成 26 年度試験研究主要成果、65-66](#)